

『論語語由』 翻刻と書き下し、現代語訳（二）

荒 木 雪 葉

凡例

『』……書物名

〔 〕……出典

（ ）……筆者による補足

二

有子曰、其為人也孝弟、而好犯上者、鮮矣。不好犯上、而好作亂者、未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者、其為仁之本與。

有子曰はく、その人となりや孝弟にして、上を犯すことを好む者は、鮮^{すく}なし。上を犯すことを好まずして、亂^{わだかま}を作^{おこ}すことを好む者は、未だこれ有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生まる。孝弟なるは、それ仁を為すの本たるか。

有子が言った。「その人となりは孝・悌であつて、目上の者をないがしろにすることを好む者は、めったにいない。目上の者をないがしろにすることを好まないのに、秩序を乱すことを好む者など、今までにいたためしがない。君子は根本のことに務める。根本につとめて初めて道が生ずる。孝・悌とは、仁の根本ではないか。」

語先王仁政之所本出也。

朱熹曰、為仁、猶曰行仁。為是。物茂卿曰、為仁於天下、以教孝弟為先。宗廟之禮、所以教孝也。養老之禮、所以教弟也。孝弟化行、民俗和順、天下自然治。語由所謂仁政者、是也。有子傷時俗衰亂、有臣而弑君、子弟而賊父兄者、而有觀感於先王仁政之所本出、所以有此語也。有孝子弟弟于茲、其人必不好犯上作亂之事、以見其効不差焉。是故君子務本、言教孝弟之為務也。教孝弟於此、而百行之美自然興於彼、謂之本立而道生也。辟諸草木之益茂、決江河沛然、莫之能禦也。有本者皆如是。語曰、堯舜之道、孝弟而已矣。為仁之本、豈外於此乎。

先王仁政の本づき出づる所を語るなり。

朱熹曰く、仁を為すは、猶ほ仁を行ふと曰ふがごとしと。物茂卿曰く、仁を天下に為すに、孝弟を教ふるを以て先と為す。宗廟の禮は、孝を教ふる所以なり。養老の禮は、弟を教ふる所以なり。孝弟の化行はれ、民の俗和順し、天下自然に治まると。語由の謂ふ所の仁政とは是なり。有子、時の俗衰亂し、臣にして君を弑し、子弟にして父兄を賊する者有るを傷みて、先王仁政の本づき出づる所に觀感すること有るは、此の語有る所以なり。孝子弟茲に有らん、其の人必ず上を犯し亂を作すの事を好まず。以て其の効の差あらざるを見はす。この故に君子本を務むとは、孝弟を教ふるの務めたるを言ふなり。孝弟を此に教へて、百行の美自然に彼に興る。これを本立ちて道生ずと謂ふなり。諸を草木の益々茂り、江河の決して沛然たるに辟へ、これを能く禦ぐこと莫きなり。本有る者は皆是の如し。語に曰く、堯舜の道は孝弟のみと。仁を為すの本、豈に此に外ならんや。

先王の仁政が基づいて出るところを語っている。

朱熹は「仁を為すというのは、仁を行うというのとほぼ同じである」と言う。物茂卿は「仁を天下に行うにあたっては、孝悌を教えることを先とする。宗廟の礼は、孝を教えるためである。養老の礼は、悌を教えるためである。孝悌の教化が行われれば、人民の風俗はなごやかでおだやかになり、天下は自然に治まる」と言う。語由に言うところの仁政とは、このことである。有子は当時の風俗が衰え亂れ、臣下にして君主を弑するものや、子弟にして父兄に逆らい傷つける者がいることを傷み、先王の仁政の基本として出発する所に思うことが

あつて、この語を發したのである。孝子・悌弟がここにいたとすれば、その人は必ず目上の者をないがしろにし、混亂を起こすことを好まない。この語を以て、仁政の効果が欠けるところが無いということをはつきりさせたのである。だから君子は根本に務めるといふのは、孝悌を教えることが務めであるということ言うのである。孝悌をここに教えれば、様々な素晴らしい行いが自然とその人に湧き起こる。これを「根本がしっかりとしたら道が生ずる」と言うのである。草木がますます茂り、江河が決壊して一面に広がるように、（素晴らしい行いが湧き起こることは）防ぎ止めることができなくなるのである。根本がしっかりとしている者は皆このようである。語に「堯舜の道は孝弟のみ」（『孟子』告子下）とある。仁を為す根本は、これに外ならないのである。

* * *

三

子曰、巧言令色、鮮矣仁。

子のたまはく、巧言令色、鮮すくなし仁。

先生がおっしゃった。「言葉が巧みで顔つきがよろしい人は、仁であることは少ない。」

語佞人必少仁也。

巧其言、令其色、夸毗譸張、熒惑衆心。是為佞人。其少仁可知也。語意與剛毅木訥近仁、相反。可參考焉。當時國君大夫、退賢忌能、秕政誤國家者、鮮有弗自佞人乱德者矣。故曰、惡利口覆邦家。或曰、鄉原、德之賊也。皆與此章、其義相發。可不戒乎。皇侃本仁上有有字、未知孰是。

佞人は必ず少仁なるを語るなり。

其の言を巧みにし、其の色を令くし、夸毗譸張し衆心を熒惑す、これを佞人と為す。其の少仁、知るべきなり。語の意は剛毅木訥仁に近しと相反す。参考すべし。當時、國君大夫、賢を退け能を忌み、秕政國家を誤る者佞人の徳を乱すよりせざる者有ること鮮なし。故に曰く、利口の邦家を覆すを惡むと、或いは曰く、郷原は徳の賊なりと。皆此の章と與に其の義相發す。戒めざるべけんや。皇侃、本仁の上に有字有りとす、未だ孰か是なるを知らず。

佞人はきつと仁が少ないということを語る。

言葉がたくみで顔つきがよく、へつらい従い、あざむきたぶらかして人々の心を惑わす、このような人を佞人とする。その人に仁の心が少ないことは、よく分かる。この語の意味は、「剛毅木訥仁に近し」『論語』子路第十三」と相反する。参考にすべきである。当時、国君や大夫は、賢者を退け能あるものを忌み、未熟な政治が國家を誤らせるといことが、佞人が徳を乱すというところから起こらないものは少なかった。だから「利口の邦家を覆すを惡む」『論語』陽貨第十

七」と言い、あるいは「郷原は徳の賊なり」『論語』陽貨第十七」と言うのである。どちらもこの章と意味が呼応している。戒めないことができようか、戒めねばならない。皇侃はもともと「仁」の上に有の字があつたと言う。いずれが正しいかは分からない。

* * *

四

曾子曰、吾日三省吾身。為人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。

曾子曰はく、吾日に三たび吾が身を省みる。人の為に謀りて忠ならざるか。朋友と交はりて信ならざるか。習はざるを傳ふるか。

曾子が言った。「私は一日に何度もわが身を反省する。誰かのために考えて、まごころからしなかつたのではないか。友達と交わるのに、まごころを尽くさなかつたのではないか。しっかりと習熟していないことを伝えたのではないか。」

語自修之要也。

三省、與三復三思三讓同語例。言其省察不翅一再也。為人謀、若臨終戒孟敬子。曰問告陽膚、其忠可知也。與朋友交、若弔子夏責三罪、

以齊衰往哭子張。其信可槩也。孝弟之道、喪祭之禮、多曰曾子以傳者。其有未習熟而述焉哉。

自ら修むるの要を語るなり。

三省は、三復・三思・三讓と語例を同じくす。其の省察、翹^たただ一再ならざるを言ふなり。人の為に謀るは、終はりに臨みて孟敬子を戒め、問いに曰^よりて陽膚に告ぐるが若^{ごと}き、其の忠知るべきなり。朋友と交はるは、子夏を弔して三罪を責め、齊衰^{しさい}を以て往^ゆきて子張を哭するが若^{ごと}き、其の信槩すべきなり。孝弟の道、喪祭の禮、曾子曰^よりて傳はる者多し。それ未だ習熟せずして述ぶること有らんや。

自らを修める要を語っている。

三省とは、三復・三思・三讓と同じ語の使い方である。その自らをかえりみるのが一度や二度にとどまらないことを言う。人の為に謀るとは、自分の臨終のときにあたつて孟敬子を戒め〔『論語』泰伯第八〕、質問にしたがつて陽膚に告げた〔『論語』子張第十九〕というようなことで、そのまごころははっきりと分かる。朋友と交わるとは、子夏を弔つて三罪を責め〔『礼記』檀弓上〕、齊衰の喪服を着て行つて子張を哭する〔『礼記』檀弓下〕のようなことで、その信をはかることができる。孝行・悌順の道、喪・祭の礼は、曾子から伝わったものが多い。しっかりと習熟していないのに述べるであろうか、ないのである。

* * *

五

子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。

子のたまはく、千乗の國を道びくに、事に敬にして信あり、用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす。

先生がおっしゃった。「諸侯の國を導くには、一つ一つの物事をつつしんで行い、信頼されるようにし、ものを使うには節約し、人民を愛し、人民を使うには適切なときを選んでする。」

語治侯國要務也。

軍國之事、無大小係民之利病。敢不敬乎。戒苟且也。令與行不副、民惑而不從。敢不信乎。戒欺誣也。量入以為出、儲蓄以備荒歉。用敢不節乎。戒奢侈也。人無尊卑、皆給君職。上下之和、出于相愛。敢不愛乎。戒侮慢也。邦本在農。本固邦寧。農時敢可奪乎。戒虐使也。凡五事、可以致治安矣。當時諸侯莫之能用、所以無盛治也。豈翹周季乎。故能知時務者、而始可與言魯論也已。

侯國を治むる要務を語るなり。

軍國の事は、大小と無く民の利病に係はる。敢へて敬せざるや。苟^{かりそめ}且なるを戒むるなり。令と行ひと副はざれば、民惑ひて從はず。敢

へて信ならざるや。欺誣を戒むるなり。入るを量りて出づることを為し、儲蓄して以て荒歉に備ふ。用、敢へて節せざるや。奢侈を戒むるなり。人、尊卑と無く、皆君職に給す。上下の和は、相愛より出づ。敢へて愛せざるや。侮慢を戒むるなり。邦の本は農に在り。本固ければ邦寧し。農の時、敢へて奪ふべけんや。虐使を戒むるなり。凡そ五の事、以て治安を致すべし。當時諸侯これを能く用ふること莫し。盛治無き所以なり。豈に翹ただ周季なるのみならんや。故に能く時の務めを知るものにして、始めて與に魯論を言ふべきのみ。

諸侯の国を治めるにあたつての重要なつとめを語っている。

軍国における様々なことは、大小となく人民の利益と弊害に関わる。つつしまないでいられようか、つつしまねばならない。いいかげんにすることを戒めるのである。命令と実際の行いとが合致していなければ、人民は惑つてしまひ従わない。信頼されるようにしないでおられようか、信頼されるようにしなければならない。欺き偽ることを戒めるのである。収入を量つて支出を決め、貯蓄しておいて不足に備える。物を用いるのに節約しないでいられようか、節約しなければならぬ。ぜいたくを戒めるのである。人は身分の尊い・卑しいに関わらず、みな君主のために働いている。上下の調和は、互いに愛し合うことから始まる。愛さずにいられようか、愛さなければならぬ。相手をいいかげんにあしらうことを戒めるのである。国の根本は農業にある。根本がしっかりとしていれば国は安定する。農業の大事な時は奪うことができようか、奪つてはならない。残酷にこき使うことを戒めるのである。この五つの事により、世の中を治めることができる

のである。当時の諸侯はこの五つの事をきちんとすることができなかった、だから盛んな治世が無かったのである。どうしてただだ、周の時代の末であつたというのみであろうか。だから時節にかなつた務めを知っている者であつてこそ、はじめてともに魯論を語ることができるのである。

* * *

六

子曰、弟子、入則孝、出則弟。謹而信。汎愛衆而親仁。行有餘力、則以學文。

子のたまはく、弟子、入りては則ち孝、出でては則ち弟。謹みて信あり。汎く衆を愛して仁に親しむ。行いて餘力有れば、則ち以て文を學ぶ。

先生がおっしゃった。「人の弟で人の子である者は、家にあつては孝行、家を出れば悌順、丁寧にかしこまつて信頼がおけるようにし、広く人々を愛して仁の人に親しむ。このように行つて余力があれば、(腰を落ち着けて、自分の行いを飾るための) 詩書六芸を學ぶ。」

語子弟宜務德行也。

老我老、而及人之老、長我長、而及人之長。故曰出入。蓋互文以言

孝弟之德所及遠也。謹信汎愛、敬事仁人、行餘學文、子弟之職是已。

文者道藝也。詩書六藝是也。夫人學道藝、則威儀才伎、斧藻其身。故

謂之文。曰夫子之文章、曰文王之文、皆是。舊說以為詩書六藝之文、

非也。蓋行者常也。晨昏出入、無適而非行。文則不然、居學以時不可

常焉。故曰行有餘力、則以學文也。然居學之中、未嘗離德行。行事之

間、亦未廢思學。行之與學、迭相為本末、而後先相濟、猶糾索然。故

又曰文行忠信。云其無有次序、可以見已。是以說者以本末為言。我斯

之未能信也。

子弟、宜しく德行に務むるべきを語るなり。

我が老を老として人の老に及ぼし、我が長を長として人の長に及ぼす。故に出入と曰ふ。蓋し文を互ひにして以て孝弟の徳の及ぶ所遠きことを言ふなり。謹信汎愛、仁人に敬事し、行餘に文を學ぶ、子弟の職、是のみ。文は、道藝なり。詩書六藝、是なり。夫れ人道藝を學べば則ち威儀才伎、其の身を斧藻す。故にこれを文と謂ふ。夫子の文章と曰ひ、文王の文と曰ふは、皆是なり。舊說の以て詩書六藝の文と為すは非なり。蓋し行は常なり。晨昏出入は適ひて行はに非ざること無し。文は則ち然らず。居學時を以てし、常あるべからず。故に曰はく行ひて餘力あれば則ち以て文を學ぶと。然れども居學の中、未だ嘗て德行を離れず。行事の間もまた未だ思學を廢めず。行はこれ學と迭ひに本末を相為し後先相濟し、猶ほ糾索するがごとし。故に又文行忠信と曰ひ、其の次序有ること無きを云ふこと以て見るべきのみ。是を以て説く者、本末を以て言を為す。我斯をこれ未だ信ずること能はざ

るなり。

子弟はよく德行に務めるべきだということを語る。

自分の老いた親を親としてその気持ちを人の親にも及ぼし、自分の年長の兄を兄として、その気持ちを人の兄にも及ぼす。だから家から出た場合、家にいる場合を言うのである。思うに、互文にすることで、孝悌の徳が遠くまで及ぶということを言っているのである。謹信・汎愛・仁の人につつしんでお仕えし、行いに余裕があれば文を學ぶ、子弟の仕事はまさにこれである。文とは道芸である。詩書六芸がそうである。そもそも人が道芸を學べば、威儀や才能・細かい技がその身を飾り立てる。だからこれを文というのである。夫子の文章といひ、文王の文というのが、いずれもこれである。旧説では詩書六芸の文と解釈するが、あやまりである。思うに、行うことはいつもすることである。朝夕や家の内外において、ぴつたりと行いではないものはない。文はそうではない。腰を落ち着けて時間をとって學び、いつもすることではない。だから行いに余裕があれば文を學ぶというのである。しかし腰を落ち着けて學ぶことにおいても、德行から離れることは決してない。物事を行うにあたつても、やはり思い學ぶことをやめることはない。行うことと學ぶこととはお互いに本末をなし、後先が互いにそろっていることは、縄をあざなうようにひとつにまとまつていのである。だから文行忠信と言つて、順序が無いことを言うことから（不可分であることが）分かるのである。そのようなわけで、解釈する者は本末を以て言うのであるが、私はこの説を信ずることができない。

* * *

七

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信。雖曰未學、吾必謂之學矣。

子夏曰はく、賢を賢として色を易へ、父母に事ふるに能く其の力を竭くし、君に事ふるに能く其の身を致し、朋友と交はるに言ひて信あり。未だ學ばざると曰ふと雖も、吾必ずこれを學びたりと謂はむ。

子夏が言った。「賢者を賢者とみとめて顔つきを改め、父母にお仕えるには力を尽くすことができ、君主にお仕えるにはその身をゆだねることができ、朋友と交際するには、その言葉に信頼がおける。

(このような人が) まだ學んでいないと言っても、私は必ず(その人は)すでに學んだと言う。」

語學問不外於行實之義也。

賢賢易色、茂卿曰、變易顔色。好賢之誠形於外也。說本皇侃。為是。舊說亦通。致身、朱熹曰、致猶委。言不有其身也。為是。好賢一事、孝一事、忠一事、信一事。凡四事、人苟兼而能之、可謂士矣。夫學、所以修行、學而無行、雖多何焉。行而得義、何有於學。故曰雖曰

未學、吾必謂之學矣。蓋亦言學行不相離之義也。茂卿曰、與上章其義相發。葺錄者之意也。

學問は行實に外ならざるの義を語るなり。

賢を賢として色を易ふるは、茂卿曰はく、顔色を變易するなり。賢を好むことの誠、外に形あらはるるなりと。說、皇侃に本づく。是と為す。舊說もまた通ず。身を致すは、朱熹曰はく、致すは猶ほ委ぬるがごとし。其の身有らざるを言ふなりと。是と為す。賢を好むこと一事なり、孝一事なり、忠一事なり、信一事なり。凡そ四つの事、人苟も兼ねてこれを能くすれば、士と謂ふべし。夫れ學は行を修むる所以なり。學びて行無くんば、多しと雖も何の為にせん。行ひて義を得、學に何か有らん。故に曰はく、未だ學ばずと雖も、吾必ずこれを學びたりと謂はむと。蓋し、亦學行相離れざるの義を言ふなり。茂卿曰はく、上章と其の義相發す。葺錄者の意なりと。

學問は實際に行うことに他ならないことを語る。

「賢を賢として色を易ふ」について、荻生徂徠は「顔色を変えるのである。賢者を好むことが表面に現れるのである」という。この説は皇侃の解釈に基づいており、正しいと考える。旧說もまた同じである。「身を致す」について、朱熹は「致すとはちようど委ねるというようなことである。(主君に自分の身をゆだねるのだから)自分の(意思で自由になる)身が無いことを言っている」という。正しいと考える。賢者を好むということが一つ、孝がひとつ、忠がひとつ、信がひとつ。この四つのことがらについて、人がもし四つともをきちんと

語君子修德之目也。

君子以位言。出門如見大賓、威重可敬憚。君子之容也。博文多識、無固陋之弊。君子之學也。愨而後求智能、故主忠信。與賢己者處、不覺與之化。故戒友不如己者。君子之過、猶日月之食、過也人皆見之、更也人皆仰之。故欲勿憚改。提要之語、不嫌句法不類、觀於周公告魯公之語、可以見焉。凡君子之病、輕佻不莊、民不敬憚。不學蔽固、臨事惟煩。專權不愨、欺誣用事、悅佞忌賢、養痴日闇。過而不改、益遂其非。此語之所以戒至矣。嗚呼長乎深宮阿保之手者、孰無此疾。古之君子、猶今之君子乎。是故能讀魯論者、明察時變物情、以為註疏亦足矣。素書曰、明莫明於體物、此之謂也。

君子、徳を修むるの目を語るなり。

君子は位を以て言ふ。門を出れば大賓に見ゆるが如し。威重ければ敬憚すべし。君子の容なり。博文多識なれば固陋の弊無し。君子の學なり。愨にして後智能を求む。故に能く忠信を主とす。己より賢き者と處る。覺えずしてこれと化す。故に己に如かざる者を友とすることを戒む。君子の過ちは、猶ほ日月の食のごとし。過つや人皆これを見、更むるや人皆これを仰ぐ。故に改むるに憚ること勿らんと欲す。提要の語、句法の不類を嫌はず。周公魯公に告ぐるの語を觀れば、以て見ゆるべし。凡そ君子の病は、輕佻なれば莊ならず、民敬い憚らず。學ばざれば蔽固たり、事に臨みて惟だ煩わす。專權不愨なれば、欺誣にして事を用い、佞を悦びて賢を忌み、痴を養ひて日々に闇し。過ちて改めずんば、益々其の非を遂ぐ。此の語の戒むる所以、至れり。嗚呼、深宮阿保の手に長ずる者、孰れか此の疾無からん。古の君

とすることができれば、その人は士だと言うことができる。そもそも學問とは、行うことを身につけ修養するためのものである。学んでも実行しなければ、多く学んだとしても何になろうか。行ってこそその義を体得できるのである。学ぶというだけのことには何があろうか。だから「まだ学んでいないと言ったとしても、私は必ず（その人は）すでに学んだと言う」というのである。私が思うに、（この章は）また学ぶことと行うことが（一体であり）離れないという義を言うものである。但徠がこう言う。「先の章と、呼応しあう内容である。論語の収録者の意図である」と。

* * *

八

子曰、君子不重則不威。學則不固。主忠信。無友不如己者。過則勿憚改。

子のたまはく、君子、重からざれば則ち威あらず。學べば則ち固ならず。忠信を主とす。己に如かざる者を友とする無かれ。過てば則ち改むるに憚ること勿れ。

先生がおっしゃった。「君子は重々しくなければ威厳がない。學問を修めたらかたくなではない。真心とまことを尊ぶ。自分より劣った者と付き合わないこと。過つたらためらわず改めること。」

子は、猶ほ今の君子の如きか。この故に能く魯論を読む者は、時變物情を明察して以て註疏と爲るも、亦足る。素書に曰はく、明は物を體するより明なるは莫しと。此の謂いなり。

君子が徳を修める項目を語る。

君子は、位のことを言う。門を出れば国の賓客に会うように（うやうやしく）する。威厳が重々しければ敬い憚られる。君子のすがたである。博文多識であれば、かたくなであるという弊害がない。君子の学問である。義理堅くあつてはじめて知識や能力ある人を求める。だからまごころやまことを尊ぶ。自分よりも賢い者といれば、知らず知らずのうちに教化される。だから自分より劣つたものと付き合うことを戒めるのである。君子の過ちは、太陽や月の食のように、過てば人は皆見るし、改めればやはり人はみな仰ぎ見る。だから改めることをためらわないようにありたいと思う。要点の語は、句法がそろつていないことを気にしない。周公が魯公に告げた語をかんがみれば分かる。そもそも君子の心配事は、軽はずみで重々しくなければ、人民は敬い憚ることをしない。学ばずかたくなであれば、物事に臨んでもただ煩わしいだけである。権力を振り回して義理堅くなければ、いつわりによつて物事を用い、おもねる臣下を喜んで賢い臣下を忌み嫌い、愚か者を養つて日々に暗くなる。誤つても改めなければ、ますます間違ひに突き進む。この上なく戒めている語である。ああ、宮城の奥深くにて養育係の手により育てられた者で、この悩みが無い者があろうか。いにしえの君子は、今の君子と同じだといふのか、そうではない。だから魯論を読むことのできる者は、時に従う変化や物事の実情

をはつきりと見抜き、註疏を作つてもやはり充分なのである。『素書』に「明とは物事を体得するより明らかなるものはない」（本徳宗道）というのは、このことである。

* * *

九

曾子曰、慎終追遠、民徳歸厚矣。

曾子曰はく、終を慎み遠を追えば、民の徳厚きに歸す。

曾子が言つた。「人生の終わりである喪の礼をつつしんで執り行い、先祖たちの祭の礼をきちんと行ふ。この二つの制度を行えば、人民の徳は厚くなる。」

語先王重喪祭之禮之意也。

曾子傷喪祭之禮廢、民情嶮薄、述古示則也。與第二章同語意。蓋先王禮制之行、民皆由之。如水有坊、不可踰越。喪也哀戚、祭也思慕、相率入徳。仁厚成俗。傳曰、納民軌物、是也。說者曰、人君行二禮、則民化其徳。似是而非矣。不則夫子制於中都、四寸之棺、五寸之槨、曰丘陵為墳。說者以為迂乎。讀者不可不察。

先王の喪祭を重んずるの意を語るなり。

曾子、喪祭の禮^い廢^えれ、民の情^い驗^{えん}薄^{はく}なるを傷み、古を述べて則を示すなり。第二章と語意同じ。蓋し先王禮制の行はるや、民皆これに由る。水の坊有るが如く、踰越すべからず。喪や哀戚し、祭や思慕し、相率いて徳に入り、仁厚く俗を成す。傳に、民を軌物に納むると曰ふは是なり。説く者曰はく、人君二禮を行へば、則ち民其の徳に化すと。是に似て非なり。しからずんば則ち夫子中都に制す、四寸の棺、五寸の槨、丘陵に回^{まわ}りて墳を為すを、説く者以て迂と為すか。讀者察せざるべからず。

先王が喪と祭の礼を重んじたその意味を語る。

曾子は喪と祭の礼が廢れ、人民の情が薄くとがってしまったことに心を痛め、いにしえのことを述べて手本を示したのである。第二章と語意が同じ。思うに、先王の礼制度が行われれば、民はみなこの制度に従い、水が堤防にさえぎられるように、規則を乗り越えることはできないのである。喪は悲しみ嘆き、祭は思い慕い、たがいに引き締めあつて徳の境地に入り、仁が厚く風俗を完成させる。伝に「人民を一定のわくに従わせる」(『春秋左氏伝』隱公五年)とあるのが、このことである。ある者は「人君が二つの礼を行えば、民はその徳に教化される」と説くが、これは合っているように見えて間違っている。そうでなければ、夫子が中都に制した、四寸の棺、五寸の槨、丘陵のように墳を作る(『孔子家語』相魯)ということ、説く者は回りくどいことだとするのか。読者は、しっかりと見極めなければならない。

* * *

十

子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政。求之與、抑與之與。子貢曰、夫子溫良恭儉、讓^{やう}りて以てこれを得る。夫子のこれを求むるや、其れ諸^{しよ}れ人のこれを求むるに異なるか。

子禽が子貢にこう尋ねた。「先生がある国においでになったら、必ずその政治についての相談をお受けになります。先生から求めて相談をお受けになるのでしょうか、それとも参与なさつて相談をお受けになるのでしょうか。」子貢は言つた。「先生はおだやかで、すなおで、うやうやしく、つつしみぶかくておいでになり、へりくだられて(政治の相談を)お受けになる。先生が何かを求められるというのは、他の人が求めるというのとは違うようだね。」

語夫子之盛徳、以解子禽之惑也。

余讀此章、知子禽不信夫子之孔甚也。夫子以天下無道而不隱。加之

所至之邦、而必聞其政。自不信者觀之、豈得不以英雄希非望為疑乎。今子禽其人也哉。故曰求之與、抑與之與。夫君子思不出其位、宜無求於人。求聞其政、是已非君子事體。若或干預其政、理當與聞之、抑不知或與之否。設疑辭以窮詰子貢也、非不信之孔甚者乎。子貢聰敏不翅、能知聖德亦能知子禽所以惑焉。故對曰、夫子有溫良恭儉之德、尚且辭讓、以得聞其政、雖有求之之跡、然視諸他人之求之者、大有徑庭也。可謂善喻矣。夫善喻人者、開而不達、使其思而得之也。孔門君子之口氣、婉約可嘉。夫子畏於陳蔡、召顏淵而問焉曰、詩曰、匪兕匪虎、率彼曠野、吾道非乎。奚為至於此。顏淵曰、夫子之道至大、天下莫容。雖然夫子推而行之、世不我用、有國者之醜也。夫子何病。不容然後見君子。咄嗟世人之不知聖德、至有欲其死者、何必陳亢微生畝是怪。此章諸家註不得語由。解得不了了。不、則抑與之與。果何謂也。朱熹之解經、字權句衡、今特遺與字。知其不可解也。鄭玄曰、願與之為治。諸家據之、以為成義乎。不得已也。求聞之與、抑與聞之與。二句皆省聞字。承上句故也。義豈不明乎。夫子溫良恭儉、六字一句。讓以得之、四字一句。與孝經哭泣擗踊、哀以送之、同句法。鄭玄誤以為五德、諸家終不能是正、繼義可通、奈其辭何。古人之文、豈有醜拙如是者哉。其諸語辭、字例見于公羊。

夫子の盛徳を語りて、以て子禽の惑ひを解くなり。

余此の章を讀みて、子禽の夫子を信ぜざること孔甚だしきを知るなり。夫子、天下に道無きを以てして、隠れずしてこれに加へて至る所の邦にして必ず其の政を聞く。信ぜざる者よりこれを觀るや、豈に英雄の非望を希ふを以て疑ひを為さざるを得んや。今子禽は其の人な

るかな。故に曰はく、これを求むるか、抑もこれに與れるかと。夫れ君子は思ふことを其の位を出でず、宜しく人に求むることなかるべし。求めて其の政を聞くは、これ已に君子の事體に非ず。若し或いは其の政に干預せば、理當にこれを與り聞くべし。抑も知らず、或いはこれに與れるや否や。疑辭を設けて以て子貢を窮詰するなり。信ぜざるの孔甚だなる者に非ざるか。子貢聰敏なること翅ならずして、能く聖徳を知り、亦能く子禽の惑ふ所以を知る。故に對へて曰はく、夫子溫良恭儉の徳有り、尚ほ且つ辭讓して以て其の政を聞くを得。これを求むるの跡有りと雖も、然も諸を他人のこれを求むる者に視れば、大ひに徑庭有るなりと。善喻と謂ふべし。夫れ善く人を喻する者は、開きて達せず、其をして思ひてこれを得しめんとするなり。孔門君子の口氣は、婉約なること嘉すべし。夫子陳蔡に畏る。顏淵を召して問ふて曰はく、詩に曰ふ、兕に匪ず虎に匪ず、彼の曠野を率うと。吾が道は非なるか。奚為れぞ此に至ると。顏淵曰はく、夫子の道至大にして、天下容ること莫し。然りと雖も夫子推してこれを行ふ。世の我を用ゐざるは、國有る者の醜さなり。夫子何ぞ病まん。容れられず、然る後に君子を見る。咄嗟世人の聖徳を知らず、其の死を欲する者有るに至る。何ぞ必ず陳亢・微生畝これを怪しまんと。此の章、諸家の註語由を得ず、解き得り了らず。さらざれば則ち抑もこれに與れるかとは、果たして何の謂ひぞや。朱熹の經を解くや、字權句衡、今特に與の字を遺す。其の解くべからざるを知ればなり。鄭玄曰はく、これに與かりて治を為すことを願ふと。諸家これに據りて以て義を成すと為ふか。已むを得ざるなり。求めてこれを聞くか、抑も與かりてこれを聞くかは、二句皆聞の字を省く。上句を承るが故なり。

義豈に明らかならざるや。夫子温良恭儉、六字一句。譲りて以てこれを得、四字一句。孝経の哭泣擗踊、哀しみて以てこれを送ると句法を同じくす。鄭玄誤りて以て五徳と為す。諸家終に是正すること能はず。義に縦へば通すべきも、其の辞を奈何せん。古人の文、豈に醜拙なることは是の如き者あらん。其れ諸の語辞、字例は公羊に見ゆ。

夫子の盛んなる徳を語ることで、子禽の惑いを解いたのである。

私はこの章を読み、子禽が夫子を甚だ信頼していないことを知った。夫子は天下に道が行われぬのに隠遁してしまわず、さらに国に行き着くごとに、必ずその政治の相談を受けられる。(夫子を) 信頼しないものから見れば、どうして英雄の望みではないことがまれであることを疑わないでいられようか。今、子禽がその人である。だから「お求めになるのでしょうか、それとも参与なさって相談をお受けになるのでしょうか」と言った。そもそも君子は自分の位に過ぎたことを思わず、当然人に求めないのが良い。自分から求めて政治の相談を受けることは、すでに君子の事柄ではない。もしもその政治に関わることがあれば、道理として当然参与して相談を受ける。そもそも参与するかどうかわからないで、疑問の言葉で子貢を問い詰めたのである。はなはだ信頼していいことではないだろうか。子貢は賢きことただならず、孔子の聖徳を理解し、また子禽の惑うわけも理解できていた。だから答えて「夫子にはおだやかで、すなおで、うやうやしく、慎み深いという徳がありになり、なおかつへりくだって譲られてからその政治に参与して相談を受けられるのだ。自分から求めたように見えるといつても、他の人が求めるといふことを見れば、大いに

隔たりがある」と言った。上手に論していると言える。そもそも人を論ずのが上手な者は、一端を開いても全てを教えることはせず、相手に考えさせて到達させるのである。孔子門下の話しぶりは、婉曲で含みがあり、よしとすべきである。夫子が陳蔡にて災厄に遭ったとき、顔淵を召してこう尋ねた。『詩経』には『野牛でもなく虎でもないのに、荒野をさまよい歩く』『小雅・魚藻之什、何艸不黄』とある。私の道はこれではないか。どうしてこのようになってしまったのか。」顔淵が言うには「先生の道は大きく、天下に受け入れられる者はいないのに、先生は推し進めようとなさっておられます。世の中で自分を用いてくださる人がいないのは、国を保つ者の醜さです。先生はどうしてお氣に病まれることがあります。受け入れられなかったその後には君子にお会いするのです。」「〔史記「孔子世家」ああ、世の人は聖徳を知らず、あまつさえその死を願う者までいる。どうして陳亢(子禽)や微生畝(『論語』憲問第十四。孔子に佞ではないかと尋ねた)を怪しむことがあるか。この章に対する諸家の註は語由を得ておらず、解釈しきれていない。そうでなければ、「そもそもこれに與かれるか」とは、果たしてどういう意味なのだろうか。朱熹が経を解釈するには、字句のつり合いを考えて、今特に「與」の字を残した。解釈できないことを知っていたからである。鄭玄は「政治にあずかって政治を行うことを願った」と言い、諸家もこれに従っているが、これで意味が通るだろうか。どうすることもできないのである。「求めてこれを聞くか、抑も與りてこれを聞くか」の二句はどちらも「聞」の字を省いてある。上の句を承けているからである。意味が明らかでないことがあろうか。「夫子温良恭儉」は六字で一句、「譲以得之」は

四字で一句。『孝経』の「哭泣擗踊、哀以送之」〔喪親第十八〕と同じ句法である。鄭玄は誤って五徳としており、諸家はついに改め正すことができなかった。意味に従えば通じるのであるが、辞としてはどうしようもない。古人の文に、どうしてこのように下手なものがあろうか。これらの語辞について、字例は公羊伝に見える。

* * *

十一

子曰、父在觀其志、父没觀其行。三年無改於父之道、可謂孝矣。

子のたまはく、父在^{いま}せば其の志を觀、父没^{みまか}りせば其の行ひを觀る。三年父の道を改むること無きは、孝と謂ふべし。

先生がおっしゃった。「父親がおいでなときはその志をしつかりと見極め、父親が亡くなられたらその行いを見極める。三年間父のやり方を変えることが無いなら、孝といえる。」

語觀人之有見於孝也。

夫孝、百行之本也。故孝子之門、必出忠臣。孝経曰、事父孝、故忠可移於君、是之謂也。韓康伯之母聞吳隱之之哭、謂康伯曰、汝若居銓衡、當學如此輩人、所謂有見於孝者也。

人を觀ること、孝に見ること有るを語るなり。

夫れ孝は百行の本なり。故に孝子の門、必ず忠臣を出だす。孝経に曰はく、父に事へて孝、故に忠君に移すべしと、この謂なり。韓康伯の母、吳隱之の哭くを聞き、康伯に謂ひて曰はく、汝若し銓衡に居らば、當に此の如き輩の人を擧ぐべしと。所謂孝に見ること有る者なり。

人を見分けることが、孝かどうかによつて見分けることがあるということを語る。

そもそも孝は様々な行いの基本である。だから孝子の門は、必ず忠臣を輩出する。『孝経』には「父に事えて孝、だからまごころを君主に移すことができる」〔廣揚名篇〕とあるのは、この意味である。韓康伯の母は、吳隱之の哭く声を聞き、康伯に「お前がもし人材を選ぶ部署に配属されたら、あのような人を選ぶべきですよ。」と言った〔『晋書』吳隱之列伝〕。いわゆる孝が見所である人である。

* * *

十二

有子曰、禮之用和為貴。先王之道斯為美。小大由之、有所不行。知和而和、不以禮節之、亦不可行也。

有子曰はく、禮はこれを用ゐるを貴しと為す。先王の道斯^{こゝ}れをして

美と為す。小大これに由るも、行はれざる所有り。和を知りて和すれども、禮を以て之を節せざれば、亦行はるべからざるなり。

有子が言った。「礼は和を用いることを大切にす。先王の道はこのことを美とする。小大となくこれに由る、しかしうまくいかないこともある。だから和（が大切だということ）を知って和する。しかし礼で引き締めなければ、またうまくいかない。」

語行禮者宜貴和也。

禮之用和為貴、伊藤維楨曰、用訓以。引證儒行禮之以和為貴。為是。夫禮、定上下尊卑之分。節制嚴肅、故非以和順行之、則勢或間隔。所以貴和也。先王之道、事無大小、以禮行之、行禮以和。故有節而不隔。節和以禮、故和而不流。和而不流、有節而不隔、禮是以文。所以為美也。小大由之、說者以此句屬上、或屬下、皆未穩當。不詳考之誤也。此文本當作小大由之。小大由之、有所不行。有所不行、知和而和。知和而和、不以禮節之、亦不可行也。古文貴簡、三句皆省一句。高雅甚。讀者詳施。

禮を行ふ者、宜しく和を貴ぶべきことを語るなり。

禮はこれを用ふるを貴しと為す、伊藤維楨曰はく、用は以てと訓ずと。證するに儒行禮の和を以て貴しと為すを引く。是と為す。夫れ禮は上下尊卑の分を定め、節制すること嚴肅なり。故に和順を以てこれを行ふに非ざれば、則ち勢い或は間隔す。和を貴ぶ所以なり。先王

の道、事の大小と無く禮を以てこれを行ふ。禮を行ふに和を以てす、故に節有りて隔たらず。和を節するに禮を以てす、故に和して流れず。和して流れず、節有りて隔たらず、禮是を以て文なり。美と為す所以なり。小大これに由るは、説く者此の句を以て上に属し、或は下に属す。皆未だ穩當ならず。詳しく考えざるの誤りなり。此の文、本當に小大これに由る、小大これに由るに行はれざる所有り。行はれざる所有れば、和を知りて和す。和を知りて和するに、禮を以てこれを節せざれば、亦行はるべからざるに作るべし。古文簡を貴ぶ、三句皆一句を省く。高雅なること甚だし。讀者は施を詳らかにせよ。

礼を行うものは、和順を貴ぶのがよいことを語る。

「礼はこれを用ふるを貴しと為す」について、伊藤仁斎が言うには、「用」は「以て」という意味で読む」と。これを証明するのに、『礼記』儒行篇の「和を以て貴しと為す」を引く。正しいと思う。そもそも礼は上下尊卑の分を定め、嚴肅に抑えるものである。だから和順を以て行わなければ、その勢いは、あるいは（人々の）間を広げてしまう。これが和を貴ぶ理由である。先王の道は、ものごとの大小となく礼によつて行われた。礼を行うのに和を以てした、だから節度があつても隔たらない。和を引き締めるのに礼によつた、だから和しても流されない。和しても流されない、だから節度があつても隔たらない。礼はこのゆえに外側を飾る、これが美とする理由である。「小大これに由る」について、説く者はこの句を上にくつつけたり下にくつつけたりする。いずれも道理になつていない。詳しく考えないための誤りである。この文はもとは「ことの小大となくこれに由る。これ

に由るが、うまく行かないことがある。うまく行かないことがあるから、和を大事だと思つて和する。和を大事だと思つて和しても礼でひきしめなければ、またうまくいかない。」とすべきである。古文は簡潔であることを大切にし、三句とも一句を省いている。はなはだ雅やかである。読者はこれをはつきりさせよ。

* * *

十三

有子曰、信近於義、言可復也。恭近於禮、遠恥辱也。因不失其親、亦可宗也。

有子曰はく、信は義に近し。言復むべければなり。恭は禮に近し。恥辱に遠ければなり。因ること其の親を失はざれば、亦宗とすべきなり。

有子が言った。信は義に近い。(信頼ができる人の)言葉は実行すべきであるからである。恭しさは礼に近い。(恭の人は)恥辱から遠ざかるからである。(人と)関わるのに親(の徳)を失わなければ、これもまた根本とすることができる。

語實行之為貴也。

傳曰、詩書、義之府也。禮樂、徳之則也。禮也義也。學而後識之。非郷人之所得知也。今有信士于茲、其言必可履矣。豈不近於知義之人乎。是信與義不相遠也。有恭人于茲、必遠恥辱矣。豈不近於知禮之人乎。是恭與禮不相遠也。恭與信也、皆非甚高難行之徳。雖郷人其實美者、咸能行之。所謂實行者是也。親亦徳名。與恭信一類。有人于茲與人懇惻親睦、則百行之美、因親來集。是親為行之宗也。宗、猶日本。因者、因仍交涉之謂也。孝經曰、因嚴以教敬。因親以教愛。聖人之教、不肅而成。其政、不嚴而治。其所因者本也。因字之義、可以見也。有子以孝弟說仁、以恭信說禮義。所以說之意雖不同、其有見於本者一也。余嘗作君子行、曰、有若睢聖、言貌皆似。禮義宗親、仁本孝弟。贊尚徳之篤也。

實行の貴しと為すを語るなり。

傳に曰はく、詩書は義の府なり、禮樂は徳の則なりと。禮や義や、學びて後にこれを識る。郷人の知るを得る所に非ざるなり。今茲に信士あらん、其の言必ず履むべし。豈に義を知るの人に近からざらんや。是れ信と義と相遠からざるなり。茲に恭人あらん、必ず恥辱に遠ざかる。豈に禮を知るの人に近からざらんや。是れ恭と禮と相遠からざるなり。恭と信とは、皆甚だ高く行ひ難きの徳に非ず。郷人と雖も其の質美なる者、咸能くこれを行ふ。いはゆる實行者、是れなり。親も亦徳の名、恭信と一類。茲に人有り、人と懇惻親睦すれば、則ち百行の美、親に因りて來り集ふ。是れ親、行の宗たるなり。宗は、猶ほ本と曰ふがごとき者、因仍て交涉するの謂なり。孝經に曰はく、嚴に因りて以て敬を教え、親に因りて以て愛を教ふ。聖人の教えは、肅な

らずして成る。其の政は、厳ならずして治まる。其の因る所の者は本なりと。因字の義、以て見るべきなり。有子、孝弟を以て仁を説き、恭信を以て禮義を説く。これを説く所以の意同じからざると雖も、其れ本を見る者有るは一なり。余嘗て君子行を作りて曰はく、有若聖を睇めば、言貌皆似る。禮義親を宗とし、仁は孝弟に本づく。徳を尚ぶの篤きを賛えるなり。

性質と行いとを貴しとすることを語る。

『春秋左氏伝』には「詩書は義の府、礼楽は徳の則」(僖公二十七年)とある。礼や義は、学んではじめてそれを知る。郷人が知ることができないものではない。今ここに信の士がいれば、その言葉は必ず実行することができる。どうして義を知る人に近くないことがあろうか。信と義とは互いに遠くないのである。ここに恭人がいるならば、その人は恥辱から遠ざかる、どうして礼を知っている人に近くないことがあろうか。恭と礼とは互いに遠くないのである。恭と信とは、どちらもはなはだ高く行うのが難しい徳ではない。郷人であつても、その性質が素晴らしい人であれば、みな行うことができる。いわゆる質行者というのがこれである。親もやはり徳の名である。恭信と同じたぐいものである。ここに、人と交わるのにいつもまごころを持つて親しくする人がいれば、それは全ての行いの素晴らしきである。親によつて人々が集まつてくる、これは親が行いの宗だからである。宗とは、おおもつというやうな意味である。因とは、それによつて関わるという意味である。『孝経』には「(聖人は) 厳に因りて以て敬を教え、親に因りて以て愛を教える。聖人の教えはきつく引き締めずして

成り、その政は厳しくなくして治まる。その因るところのものは根本である」(『聖治第九』)とある。因の字の意味が分かる。有子は孝悌で仁を説き、恭信で礼儀を説いた。説いた意味は同じではなくても、その根本に見えるものは同じである。私はかつて君子行を作り、そこでこう言った。「有若は聖人に憧れて、言葉や容貌が似ていた。礼儀は親を宗とし、仁は孝悌を根本とする。」(『荒木見悟主編『亀井南冥・昭陽全集』(葦書房、一九七八年)には未収録) 徳を篤く尊んでいることをたたえるのである。

* * *

十四

子曰、君子、食無求飽、居無求安。敏於事而慎於言、就有道而正焉。可謂好學也已。

子のたまはく、君子、食は飽くるを求めず、居は安んずるを求めず。事に敏にして言に慎み、有道に就きて正す。學を好むと謂ふべきのみ。先生がおっしゃった。「君子は、食べ物はおなかいっぱいになることを求めず、居所は安心できることを求めない。物事に敏感であつて言葉を慎み、(その上で) 有道の人について正す。(こうであれば) 學を好むと言ふことができるね。」

語君子之用心也。

茂卿曰、食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、是君子之行也。然必就有道而正焉。而後可謂好學也已。蓋小人之志在溫飽、君子則否。所事天職也。不可不敏焉。一言出而民知其過也。不可不慎焉。在上之人當爾。學而成長民之德者、當爾。故曰君子之行也。凡孔子所謂學者、學先王之道也。有道、言有道藝者。先王之道存焉。故就有道而正焉。謂之好學也。魯按、夫子以好學稱者、在門弟子獨有顔子而已。君子學以致其道。不學則莫以致其道焉。可見好學之為君子之大行也。故衛孔圉之汰、苟有敏而好學、不恥下問之美、則不非其諡文。蓋取不失君子之大行也與。

君子の用心を語るなり。

茂卿曰はく、食は飽くるを求めず、居は安んずるを求めず。事に敏にして言に慎む。是れ君子の行ひなり。然れども必ず有道に就きて正す。而る後に學を好むと謂ふべきなるのみと。蓋し小人の志は溫飽に在り。君子は則ち否。事ふる所は天職なり。敏ならざるべからず。一言出だして民其の過ちを知るなり。慎まざるべからず。上に在るの人、當に爾るべし。學びて民の徳を成長せしむる者、當に爾るべし。故に曰はく、君子の行ひなり。凡そ孔子のいはゆる學とは、先王の道を學ぶなり。有道は道藝有る者を言ふ。先王の道存す。故に有道に就きて正す。これを學を好むと謂ふなり。魯按ずるに、夫子好學を以て稱する者、門弟子に在りて獨り顔子有るのみ。君子學びて以て其の道を致す。學ばざれば則ち以て其の道を致すこと莫し。見るべし、學を好むの君子の大行たるなり。故に衛孔圉の汰なる、苟も敏にして學を

好み、下問を恥ぢざるの美有れば、則ち其の文と諡さること非ざるにあらず。蓋し君子の大行を失せざるを取るか。

君子が心を用いるところを語る。

荻生徂徠が言うには、「食はおなかいっぱいになることを求めず、居所は安んずることを求めない。物事に敏感で言葉を慎む。これは君子の行いである。しかし必ず有道の者について正す。そうして初めて學を好むとすることができのだ」と。思うに、小人の志は溫かい家やおなかいっぱいの食物にある。君子はそうではない。仕事は天から与えられたものである、敏感でなくてよいわけがない。一言口に出せば人民はその過ちを知る、慎まなくてよいわけがない。上に立つ人はまさにこうあるべきである。學んで民の徳を成長させる者は、まさにこうあるべきである。だから君子の行いと言うのである。おしなべて、孔子の言う學とは、先王の道を學ぶことである。有道とは道芸ある者を言う。（道芸には）先王の道が存在する。だから有道について正すのである。これを學を好むと言う。魯が考えるに、夫子が學を好むと稱した者は、門弟子の中でただ顔子のみである。君子は學んで道に行き着く。學ばなければ道に行き着かない。學問を好むということが君子の大いなる行いであることが見て取れる。だから衛の孔圉のような者でも、もし物事に敏感で學問を好み、目下のものに尋ねることを恥としない立派さがあれば、文と諡されないことがない（『論語』公治長第五）。思うに、君子の大いなる行いを失わなかったことを取ったのだらうか。

* * *

十五

子貢曰、貧而無詔、富而無驕、何如。子曰、可也。未若貧而樂道、富而好禮者也。子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨。其斯之謂與。子曰、賜也、始可與言詩已矣。告諸往、而知來者。

子貢曰はく、貧しくして詔ふこと無く、富みて驕ること無きは、何如。子のたまはく、可なり。未だ貧しくして道を樂しみ、富みて禮を好む者に若かざるなり。子貢曰はく、詩に云ふ、切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如しと。其れ斯の謂ひか。子のたまはく、賜や、始めて與に詩を言ふべきのみ。諸に往を告げて、來る者を知る。

子貢が言った。「貧しくても詔うことなく、豊かであつても驕ることがないというのは、いかがでしょう。」先生がおっしゃった。「まあいい。まだ、貧しくても道を楽しみ、豊かであつても礼を好むというのにはかなわないよ。」子貢が言った。『詩經』〔衛風・淇奥篇〕に『骨や象牙や、玉や石を研ぎ磨くように。』とありますが、このことでしょうか。」先生がおっしゃった。「賜よ、はじめてともに詩を語ることができるね。すでに言ったことから、今から言うことが分かるのだから。」

因問語賢者之行也。

夫富、不與驕期、而驕自至。貧不與詔期而詔自至。人士雖有學識者、或所不免。故曰、貧而無怨難、富而無驕易。子貢不受命而貨殖其富有也。結駟連騎、遊說諸侯。為奔轅之友於夫子。非少壯之可辨。豈不卓犖盛行乎。雖然、視諸伊尹樂堯舜之道於獻畎、周公禮待賢士於衡宰、亦有間遠矣。是問答所由來也。茂卿解此章、以為治民之事、其所引用、亦頗確乎。可據。然使民皆貧而樂道、富而好禮者、豈可得乎。且古所謂富者、多兼貴言之。何則聖人制民之產、仰以事父母、俯以養妻子、保生送死無憾、則足矣。故唐虞三代之盛、耕甫田而食、繞康衢而居者、無貧乏不聊生者。亦無富厚不安分者。若其有之、蓋在春秋政亂之際乎。鄭商人弦高將市於周、遇秦師。以乘韋先牛十二、以犒秦師。豈非子貢貨殖連騎之比耶。既有陶朱公倚頓輩。至呂不韋奇貨而極矣。聖人之治而有此陋乎。故記曰、禮不下庶人。為庶人遽其事而不能充禮故也。由是推之、夫子豈得有使民富而好禮之言哉。可謂誤矣。朱熹就子貢身上說之、不可易也。切磋琢磨之鮮、茂卿特詳悉、莫以尚焉。往者、已往也。來者、將來也。古文之略而不密。似梗而古奧甚。皇侃本、作樂道。今從之。

問ひに因りて賢者の行ひを語るなり。

夫れ富は驕りを期せずして驕り自づから至る。貧は詔ひを期せずして詔ひ自づから至る。人士、學識有る者と雖も或いは免れざる所なり。故に曰はく、貧しくして怨み無きこと難し、富みて驕り無きこと易しと。子貢命を受けずして貨殖す。其の富有るなり。駟を結びて騎を連ね、諸侯に遊説し、夫子に奔轅の友たる。少壯の辨すべきにあら

ず。豈に卓犖たる盛行あらざるや。然りと雖も諸を伊尹堯舜の道を献
敵に樂しみ、周公賢士を衡宰に禮待するに視れば、亦間有りて遠し。
是の問答の由来する所なり。茂卿此の章を鮮くに、以て治民の事と為
し、其の引用する所、亦頗る確乎として據るべし。然れども民をして
皆貧しくして道を樂しませ、富みて禮を好ましむる者、豈に得べけん
や。且つ古の謂はゆる富とは、多くは貴きを兼ねてこれを言ふ。何と
なれば則ち聖人民の産を制して、仰ぐに父母に事ふるを持つてし、俯
くに妻子を養ふを以てし、生を保ちて死を送り、憾みなければ則ち足
る。故に唐虞三代の盛んなる、甫田を耕して食べ、康衢を繞りて居る
者、貧乏にして生を聊かにせざる者無く、亦富厚にして分に安んぜざ
る者無し。若し其れこれ有らば、蓋し春秋政亂の際に在らんか。鄭の
商人弦高、將に周に市せんとして秦師に遇ふ。乗韋を以て牛十二を先
として、以て秦師を犒ふ。豈に子貢貨殖して騎を連ぬるの比に非ざ
るや。既にして陶朱公倚頓の輩あり、呂不韋奇貨を居くに至りて極ま
る。聖人の治にして此の陋有らんや。故に記に曰はく、禮は庶人に下
さずと。庶人其の事を遽にして禮を充たすこと能はずと為すが故なり。
是れに由りてこれを推すに、夫子豈に民をして富みて禮を好まし
むるの言有るを得んや。誤りと謂ふべし。朱熹子貢の身上に就きてこ
れを説くも易とすべからざるなり。切磋琢磨の鮮、茂卿特に詳悉たり
て以て尚ぶこと莫し。往は、已に往くなり。來は、將に來るんとする
なり。古文の略して密ならざる、梗ぐに似て古奥甚だし。皇侃本、道
を樂しむに作る。今これに従ふ。

（子貢の）問いによって賢者の行いを語る。

そもそも富は、驕りを予定せずして驕りが自然と至り、貧しさ
は、諂うことを予定せずして諂いが自然と至る。教養や地位の有る人
で学識がある者であっても、あるいは免れることができない。だから
「貧しくても怨まないでいるのは難しく、富みて驕らないでいるのは
易しい」（『論語』憲問第十四）と言うのである。子貢は命を受けない
のに貨殖した（『論語』先進第十一）。彼には富があつた。四頭だての
馬車に馬を連らねて諸侯を遊説し、夫子と馬車を奔らせる友となつ
た。若者がわきまえることができるものではない。どうして非常にす
ぐれたことを盛んに行わないだらうか。そうであっても、このことと
伊尹が田畑を耕しながら堯舜の道を樂しんだことや、周公が賢士を衡
宰に礼をつくして待遇したことと見比べると、やはり遠く隔たつてい
る。（この章の）問答が起こつた理由である。荻生徂徠はこの章を解
釈するのに、民を治めることと解釈し、引用したところも確乎として
根拠とすべきである。しかし人民に皆貧しくても道を樂しみ、豊かで
あつても礼を好むようにさせるといふことは、どうして出来ようか。
しかもいにしへのいわゆる富とは、多くは身分が高いことも兼ねて言
う。そうであれば聖人が人民に行つた政策は、仰げば父母にお仕え
し、俯いては妻子を養う（『孟子』梁惠王上）ようにする。生きてい
る人を養い、亡くなつた人を送るのに憾みがなければ充分であつた。
だから唐虞三代の盛んな世の中では、甫田を耕して食べ、大小の道路
をめぐらして住む者に、貧乏でも人生をどうにか運ばない者は無く、
豊かでも自分の分に安んじない者は無かつた。もしこれらの人がある
とすれば、思うに、春秋の政が乱れたときのことであろうか。鄭の商
人弦高は周で商売をしようとしていたとき、秦の軍隊に遭遇した。な

めし皮四枚を持つて牛十二頭をすすめ、秦の軍隊をねぎらった〔『春秋左氏伝』傳公三十三年〕。どうして子貢が金儲けをして馬を連れねるといふことと比べられようか。そのうちに陶朱公や倚頓の（ような莫大な財産を築いた）輩が出て、呂不韋が秦の公子という掘り出し物を手に入れたところに（富は）極まった。聖人の治世にこのようないやしいことがあつただろうか。だから『礼記』（曲礼上）に言うには、「礼は庶民には下さない」と。庶民がにわかになんかそれを行つても、礼を充分につくすことができなくなるからである。これによつて

推して考えると、夫子はどうして人民に豊かであつても礼を好ませようという言を出したのであろうか。誤りというべきである。朱子は子貢の身の上についてこの章を解説するが、簡単にはいかない。切磋琢磨の解釈は、荻生徂徠は特に詳しいが、重視しているわけではない。往とはすでに行つたということである。来とはまさに来ようとするということである。古文が省略してきつちりと書いていないのは、塞ぎとめるように見えて、はなはだ古風で難解である。皇侃本には「道を樂しむ」とあり、いまこれに従う。

* * *

十六

子曰、不患人之不己知、患不知人也。

子のたまはく、人の己を知らざるを患へず、人を知らざるを患ふ。

先生がおつしやつた。「他人が自分を知らないことを気にかけない。他人を知らないことを気にかける。」

語學者之用心也。

茂卿曰、不患人之不己知、知命也。患不知人、仁以為己任也。夫學、學先王之道也。學以成徳、將用諸世、而世不我知、莫所用之。廼負初志、學者之患。不亦宜乎。祇君子知命、故不患焉耳。仁以為己任、故知人者、亦將用之也。天或命我以國家。不知人則何以用之。故知人者、將器使之也。器使之道、天下無棄材。學者所以役其心可知也。

學者の心を用ふるを語るなり。

茂卿曰はく、人の己を知らざるを患へずとは、命を知るなり。人を知らざるを患ふとは、仁以て己が任と為すなり。夫れ學は、先王の道を學ぶなり。學びて以て徳を為す。將に諸を世に用いんとして、而も世我を知らず、これを用ふる所莫し。^{すなは}廼ち其の初志を負ふが學者の患なり。亦宜しからざるや。祇だ君子のみ命を知る。故に患へざるなり。仁以て己が任と為す、故に人を知る者、亦將にこれを用ゐんとするなり。天或いは我に命ずるに國家を以てす。人を知らざれば則ち何を以てかこれを用ゐん。故に人を知る者、將にこれを器使せんとするなり。器使の道は、天下に棄材無し。學者其の心を役する所以、知るべきなり。

学問を修める者の心の使い方を語る。

荻生徂徠は言う。「人が自分を知らないことを気にかけない』について、（知るとは）命を知ることである。『人を知らないことを気にかける』について、仁を自分の任務とするということである」と。そもそも学とは、先王の道を学ぶことである。学ぶことで徳を完成させ、その徳を世の中で用いようとしても、世の中が自分を知らず、用いるところがない。つまり、その初志を背負っているのが学問を修める人の心配事である。なんと宜しいことではないか。ただ君子のみ天命を知る。だから心配しないのである。仁を自分の任務とする、だから人を知っている者は、やはり人を用いようとする。天がもしも自分に国家を（つかさどることを）命じたとしたら、人を知らなければどうやって人を用いようか。だから人を知っている者は、相手を能力にに応じて用いようとするのである。能力に応じて用いる方法においては、天下に棄てるべき人材はない。学問を修める者が心を働かせる理由が分かる。

※『論語語由』活字化と書き下し、現代語訳（二）については『比較思想論』第18号、比較思想学会福岡支部、二〇一〇年三月に掲載した。